

生を喚起するモルフエーの照射「かたちの詩学」

◆母袋俊也

向井周太郎著

『かたちの詩学 I・II』

中公文庫——各一一四三円(税別)

本書は『かたちの詩学 morphopoesis I・II』(美術出版社・二〇〇三)を原本とし、二冊の文庫として新たに再構成された向井周太郎の評論集である。

「コンクレテ・ポエジー」の提唱者で、元ウルム造形大学教授、著者の師でもあるオイゲン・ゴムリン

ガー氏は著者を、美大デザイン学科の教育者、プロダクトデザイナー、さらに記号論やデザイン、現代美術の分野に関する論考の著述者であり、コンクレテ・ポエジーの詩人であると解説している。

著者は、「基礎デザイン学」を提唱、「デザイン」の専門性とは一つの専門領域には特定しえず、それは哲学にも似た総合性であり、具体的な「生」の現実世界の形成を対象とした文化や社会を再編していく営みであると位置づける。しかしこれらの評論はデザインそのものに向けられていたのではなく、「基礎」の概念に託された「Science」すなわち

「知の根幹」「知の源」まさにその基礎を形成する大地(Urte)に脈々と流れる水脈の如き知の全体性を対象としているのである。

ルネサンス、古代ギリシアへと遡行する西欧伝統の水脈、ルネサンス以降の西欧合理精神の思惟の、また時には水墨や孔子にまで遡る東洋思想、あるいは「モデルネ」、ジャック・デリダの西欧の「知の脱構築」の、またはC・S・パースの記号概念などの幾多の水脈は、向井によって吸い上げられ、それぞれは領域を縦横無尽に横断し、加えて時間軸も超え、さらなる関係を築きながら、生々しい律動感に富んだ「生の全体

性」としての大地・思想、哲学を形成している。

それらの思想は森の深さにも似た奥行きと果てることのない宇宙への拡がりをも連想させる幅広い知を備え、かつ根源的で、互いが関係づけられていく有機的な全体性を持った総合性を顕わにしている。

そしてそれらは、再び水脈へとメタモルフォーゼし、生成を続けるモルフューとしてのデザインにこそがれているかのようなでもある。

思うに、デザイン、デザイン教育の場において向井という哲人の出現は、あるいは突発的な偶然であり、西洋にも東洋にも、さらに記号論にも通じたこの思想家にして表現者をデザインが得ることのできたこと自体、いわば一つの大きな奇跡であったのかもしれない。

これらの思想には、根源的にして

宇宙の始原へ迫るような生氣に満ちた全感覚の人間精神が生々しく脈打っている。

そこには、眼という器官を通して自然を観察、観照し根本現象を追究、開示した『色彩論』、『形態学』の有機性に満ちたゲーテ思想の源流が根幹にあると考えられる。

自律的に思惟する近代的自我や近代科学的思考方法に深い疑惑を抱いたゲーテは『色彩論』においては、ニュートン光学の反駁として、主観と客観との相触れるところに「生命」があるという立場から、外なる自然と人間の内なる自然との共鳴現象として色彩をとらえた。我々の主観「私たちの眼」により、客体である色彩に「生」を吹き込んだのである。

また後にシユタイナーが有機体学と呼んだ『形態学』では、動植物の

形成を、「根源的な形象」(Urbild)に求め、それぞれの基本的器官を原葉 (Urdatt)、原椎骨 (Urwirbel) とし、その生成、変形、過程を直観、照察する。その対象は自然研究が忘れがちな「かたち」であり、それはまさにモルフュー「生きたかたち」なのである。

これらのゲーテ思想が、近代デザインの礎を築いたバウハウスにも、実は本質的な影響を及ぼしたと著者は指摘する。

近代合理主義、機能主義を背景にしたバウハウスに見られる、装飾の排除、抽象化するなわち捨象が示すようなモダニズムの還元主義的性格と、一方大宇宙の生命の中にすべての根源を見、「生」の全体性を求めたゲーテ思想は、一見近代代的、非合理的、神秘的ですらあり、両者は相反関係にあるようにも映る。

だが、著者はパウハウス運動を、もともと手と機械、個人の感性の解放と共同体のダイナミズム、東洋的神秘主義と西洋的近代理性など種々な対立項の共存、統合を目指した「生」の全体性の在り方を問うた試みだったとする。確かに初期指導者であるヨハネス・イッテンの東洋思想への傾斜に留まらず、カンディンスキーの抽象化の実践もまた、形象の還元化による捨象ではなく、自らの「内的必然性」と画面（全体性）内での統合であり、その絵画生成はゲートから多大な影響を受けたシュタイナーの人智学を受けてのことであつたことも加えて示唆的である。

ポストモダンを生きる今日、パウハウスを含めたモダニズムの無批判で一義的な解釈に対する警告と見直しを、著者は促す。

向井の表現者としての核でもある

コンクレート・ポエトリーは、デリダがフェノロサの漢字受容を引用し指摘するように、漢字の持つ図象性を内包する表意性とアルファベット表記の西欧合理性の差異その両者を生きるエクリチュールと理解できる。記号の持つ恣意性を指摘したのはソシュールだったが、フッサールは相似、有縁的な関係を像 (Bild) と呼び両者を区別したのだった。ここでは記号が像のかたちを得、詩学を形成している。

本書には、その表題に相応しいように豊富な図版が織り込まれている。文庫化の小判化はやや鮮明さを失わせはしたが、それらゲート、クレーらの手稿は実に生々しく美しい。殊に向井自身のテーマである「世界プロセスとしての身振り」展の展示パネルの膨大な図版は、幾多の水脈から吸い上げられ、すがたを

現した向井思想の数々が、再び像・かたちを得、星座群を形成し、はるか天界から我々を照射しているかのようで圧巻である。まさに「生」を喚起する「かたち」像の詩学」がここにある。

(もたいとしや・画家)